

## 市長就任記者会見（H30年1月31日）の発言要旨

記者）市長就任にあたって、一言お願いします。

市長）市長訓示でも申し上げましたが、私は、久留米市での行政経験は不十分です。そこは市議会議員の皆さんや副市長、職員の助けを借りながら市政運営を行っていききたいと思います。

一方で、民間の経験や国会議員の経験を生かして、変えるべき点は変えていきたいと考えています。ただこれは、すぐにできるものではないので、半年くらいかけて、私自身も勉強し、私のことも理解してもらって、職員と一緒に変えていききたいと思います。

久留米を住みやすさ日本一にする、活性化するといった大きい目標があります。その目標を達成するために、これまでのやり方では不十分な点があれば、早期に変えていく考えです。

また、時代の要請もあります。IT化、情報革命の真っ最中。これらを取り入れて、市民に対する行政サービスの質や内容を良くするとともに、久留米の良いものを外に向かってどんどん発信したいと思います。

記者）まずは、新年度予算と人事が大きな仕事になると思いますが、考え方を教えてください。

市長）大きな柱としては、檜原市政を継承します。過去の経緯なども踏まえて、これまで決まったことについては、しっかりとコミットします。その点は、両副市長に相談しながら、決めていききたいと思います。

予算に関しては、政策的経費は、檜原市政をさらに発展させていくために、良いものは伸ばしていくが、時代遅れでただただと続いているものについては思い切って手を入れて、カットしていく考えです。そして、浮いた予算を重点的に、住みやすさや暮らし、地方創生、地域活性化、文化やスポーツといった政策予算に組み替えていきたいと考えています。ただこれは、時間がかかることなので、市議会ともしっかりと議論しながら進めていききたいと思います。

記者）副市長人事については、どう考えていますか。

市長）当面は現在の両副市長でいきたいと考えています。行政は、継続が大切で、知見も必要。現時点で変えることは、現実的ではないと考えます。両副市長には、しっかり支えてもらいたいと思います。

記者）前市長との関りは、どう考えていますか。

市長）いろいろな相談ができる関係を築いていききたいと思います。過去の経緯を踏まえる

ことは、極めて重要。市長として大きな判断が必要なとき、経験を踏まえて相談ができる関係があるのは強みだと思います。檜原前市長だけでなく、他の首長やその経験者との関係も作っていきたいと考えています。

記者) 政策経費に相当程度のマイナスシーリングをかけるという話がありました。

市長) シーリングの具体的な数字は言えませんが、ただだらと継続している事業がないかの検証が必要だと思っています。それにはある程度の時間を要します。

シーリングをかけることで、少しでも余剰金を生み出し、住みやすさや成長といった政策に重点的に配分していく考えです。

記者) 大久保色が出てくるのは、6月議会の本予算からという理解でいいのでしょうか。

市長) そういうことになると思います。

記者) 360度の多面的な人事評価制度については、導入はいつからと考えていますか。

市長) すぐに全面的な形で取り入れるのは、現実的には難しいところもあります。人事担当部署と話を進めていく考えです。導入を検討している国の動きも見ながら、就任期間中には導入できるようにしていきたいと思っています。まずは、幹部職員から取り入れ、うまくいけば、だんだんと対象を拡大していこうと思っています。

こうした人事評価制度を取り入れることで、部下が自分をどう見ているのか、何が求められているのかを合理的に考えて行動するようになると思います。職員の考え方が変わること、組織運営のやり方も変わっていくと思います。その基準は、市民にとって素晴らしいサービスを行えるかどうかということです。

記者) 子どもの貧困率などは、緊急を要すると言われた。6月の予算などで早速具体化すると受け止めてよいですか。

市長) よく現実を見て考えていく必要があると思います。データの数字やその数値がどうやって発生したかを確認し、その上で、解決策として、まずは自助、次にコミュニティなどでの共助を基本に考え、それで不十分ならば公助として税金を投入するというアプローチになると思います。

記者) 大久保市長だからできることは、どんなことでしょうか。

市長) 政策面ではしっかりと檜原市政を継承し、発展させます。しかし、キャリアは前市長とは全く異なるので、到達点に持っていく手法は変わると思います。最終的に目指すのは、職員の適材適所の配置と自分で考え行動する職員の育成。360度の評価などで、みんなが成長できるよう、互いにアドバイスするカルチャーを作っていくことができると思います。また、女性の活用についても、力を引き出せるよう、しっかりとやっ

ていきたいと考えています。

記者) 職員への権限移譲については、具体的にどのようなになるのでしょうか。

市長) 経験豊かな副市長がいらっしゃるので、副市長に大きな方針を出したら、副市長が事実上判断する、副市長がやっていたことは、部課長に移譲するというを考えています。最終的に責任を取るのは私ですが、一定の範囲で大方針を出したら、実務を縛る必要はなく、自由にやってほしいと思っています。その上で、失敗があれば、報告してもらい、失敗しないような対応を図っていきたいと考えています。

記者) 楠田大蔵氏が太宰府市長になったことについて、ご感想は。

市長) いろんな経歴を持った人が、首長になることは良いこと。国会議員と違い、市長はオンリーワンの存在です。地方自治体の長はやりがいがあり、自分には合っていると思います。

記者) 今後の市議会との関係づくりは。

市長) 市長選後、ラグビーで言う「ノーサイド」を宣言しました。敵も味方も、相手を讃えるという気持ちを持つということ。これからは、二元代表制の中で、いい緊張感を持ちながら、一緒に手を携えて久留米市の発展のために頑張っていきたいと考えています。